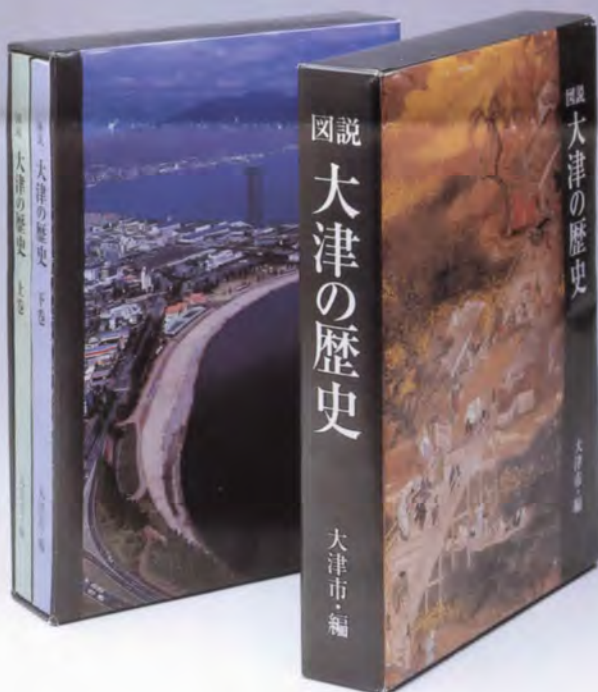


## 『図説 大津の歴史』いよいよ刊行



今回の「歴博だより」は、平成二一年度の博物館の年間計画をご紹介します。

本年度は、平成九年度から市制一〇〇周年の記念事業として準備を進めておりました『図説大津の歴史』が一〇月にいよいよ発刊となります。史跡・資料等のカラー写真や図版を中心とし、最新の研究成果を取り入れた、わかりやすく見て楽しめるものになる予定です。

展覧会は、夏休み期間中に特別陳列「琵琶湖観光の幕開け」、秋には、企画展「動物彫刻の世界」の二回を開催いたします。「琵琶湖観光の幕開け」では、蒸気船の登場で幕を開けた琵琶湖の近代化が、琵琶湖の風光を生かして観光事業へと転身していく様子を紹介いたします。また、「動物彫刻の世界」では、日本の宗教美術の脇役として登場する動物彫刻にスポットをあて、その歴史的な展開を名品によって紹介いたします。

また、本年四月からの新しい取り組みとして、常設展示室内の一部を使って「ミニ企画展」のコーナーを新たに設けることになりました。いままで本館で収蔵しているものの、展示する機会がなかった本館の館藏品・寄託品の数々を順次お披露目してゆく予定です。

平成二年一〇月に開館した当館も、九年目を迎えることとなりました。本年は、来たるべき開館一〇周年に向けて、なお一層皆様に親しまれる博物館づくりに努力してゆく所存です。皆様のご来館をお待ちしております。

## 大津市制一〇〇周年記念

## 『図説大津の歴史』

明治三十一年(一八九八)十月一日、人口三万二千人余をもって、滋賀県内で最初に市制を施行した大津市は、平成十年に記念すべき市制施行一〇〇周年を迎え、様々な記念事業が実施されました。その最後をしめくくるものとして、平成十一年十月『図説大津の歴史』を発売します。原稿・古代から明治四年(一八七二)の廃藩置県までを対象とした上巻と、以後平成十年の市制一〇〇周年記念事業までを含んだ下巻の二巻からなり、全体で五百ページを越えます。構成も、通史的に叙述するのではなく、大津市の歴史を知る上でポイントとなる二五〇余りの項目を選びだし、見開きの二ページまたは四ページで完結するようにしました。

大津市では、過去四度にわたり大津市史を発売していますが、今回の『図説大津の歴史』の最大の特徴はその書名が示す通り、写真や図版を中心に捉えて楽しむ本を目指したところです。千点を越える写真は、昔のモノクロ写真を除いて原則的にカラーで、図や表もカラーを採用することで、見やすくなるよう工夫しました。また、内容では次のような特徴があげられます。

第一に、図版の中にコンピュータグラフィックを取り入れたことです。発掘調査の成果が基本となる原稿・古代の分野では、遺構からの復元をコンピュータグラフィックで実現しました。写真①は、再建時の穴太庵寺金堂を復元したものです。今までは、礎石や基壇などの発掘状況を示す写真が中心でしたが、このような画像の処理によって、穴太庵寺のイメージが大きくひろがります。この他、崇福寺、南滋賀町庵寺、惣

山遺跡などで、同様の復元を行っています。

第二は、当然のことながら新資料の掲載です。大津市歴史博物館で進めている資料調査や、『図説大津の歴史』編さんの過程で市民の皆さんから提供いただいた数多くの資料を、掲載しています。古代では、壬申の乱で敗れた大友皇子の伝承地を、神奈川県や千葉県に訪ねました。中世では、赤穂浪士の墓があることで知られている東京の泉岳寺で、大石内蔵助の先祖にまつわる古文書を(大石内蔵助の先祖は大津市の大石学区の出身)、近世では堅田におかれていた堅田藩堀田家の子孫に伝わった藩主の画像や領地目録を見つけることができました。近代では明治初年の大津町の写真



写真①



写真②

(モノクロに彩色)、現代では廃線となった江若鉄道(モノクロに彩色)や昭和三十年の瀬田町合併記念事業(瀬田町と上田上村の合併)など、市内・県内は勿論、遠く県外や海外から発見された数多くの貴重な新資料を、掲載することができました。

第三は、航空写真の利用です。昭和三十年代以降の高度成長期における大津市の変貌には、目を見張るものがあります。その変貌をとらえるため、平成十年の五月と十月の二度航空写真を撮影しました。浜大津から膳所にかけてのなごさ公園の整備、各地に開発されていった大規模団地、古い街道や町並みと対照的な新しい道路など、空からながめた大津の町は、ふだん接するのとは違った角度で市民の皆さんの興味を引くことになると思います。ちなみに、ケースの裏全面を飾る写真②は、比叡山を背景としたサンシャインビーチを、空から撮影したものです。

十月発行の『図説大津の歴史』を、是非ご期待下さい。

## 特別陳列

## 琵琶湖観光の幕開け

会期 平成二十二年七月三十一日(土)まで  
九月五日(日)まで

古来から琵琶湖は、東西交通の動脈として機能してきました。北国や東国の物資が琵琶湖を縦断し大津から京・大坂へ運ばれていったのです。その主役は、丸子船と呼ばれる木造和船でした。帆に風をはらみ南北を行き交う様子は、江戸時代の名所図に湖上の風景として活写されてきました。

しかし近代に入ると、いち早く蒸気船が導入され、湖上を往来するようになります。明治二年(一八六九)、加賀大聖寺藩の石川璋と大津百艘船仲間の一人一庭啓二の努力によって就航した「一番丸」がそれで、以後湖上に続々と蒸気船が浮かび過激な物資の争奪戦を繰り広げるまでに至ります。湖上のスピード化は、湖国の人々に近代という時代を実感させたことでしょう。こうした湖上の変化とともに、鉄道も次第に開通してゆき、湖国に新たな交通体系が形成されてゆきます。

明治一四年、大津―長浜間に鉄道連絡船が就航します。これは、湖東地方の鉄道開通が遅れていたため、東西の動脈の一部を汽船が担うことになり、琵琶湖航路は最盛期を迎えます。しかし、明治三年の東海道線全線の開通により動脈としての機能は、終焉を迎えます。

ただこのことが、汽船の担っていた交通路としての役割を完全消し去ったわけではありません。湖上を行

き交う汽船は、湖の西岸、東岸の各港を結び、対岸との行き来にも便利な航路が縦横に張り巡らされていました。汽船は、人と荷物を運ぶ湖国の人々の足として重要な役割を果たし、これは鉄道網が整備され、自家用車が普及するまで基本的に命脈を保っていたのです。

さて、こうした人々の足としての機能のほかに、琵琶湖の汽船各社が力を注いだのは観光です。明治末年からその傾向が見えはじめ、大正一年には大型観光船が就航し、琵琶湖は本格的な観光の時代を迎えます。折しも京津電車や大津電車(後の京阪電鉄)が開通し京阪神と浜大津が結ばれ、気軽に湖国観光が楽しめるようになったのも追い風でした。

船で琵琶湖の風光を楽しむ鳥めぐりや近江八景めぐりのほか、冬はスキー船、夏は水泳船といった季節に適った企画が設けられ、それぞれの地域を開発してゆきます。船を軸としたリゾート開発が進められていったわけです。

こうして琵琶湖観光は、昭和初期に黄金時代を迎えることになりました。しかし、やがて戦時色が強まってゆくと、観光は琵琶湖の表舞台から退いてゆきます。華やかさを失った琵琶湖が、再び活況を呈するのは、昭和二六年の「はり丸」就航まで待たなければなりません。琵琶湖の女王と呼ばれた大型観光船「はり丸」の就航は、新たな琵琶湖観光の幕開けと呼んでも良い出来事でした。

本展では、近代以降の琵琶湖における汽船の歩みや役割と、琵琶湖の風光を前面に押し出した琵琶湖観光の足跡をたどりながら、琵琶湖と人々の係わり的一端を紹介しようとするものです。



浜大津港の風景



水泳船のポスター

## 企画展

## 動物彫刻の世界

宗教美術の脇役たち

会期 平成二十二年一月二三日(土)~

一月二八日(日)

わが国のひとびとが動物たちの姿を立体として造形化しはじめたのは、縄文時代のことです。それは最初おもに土で造られ、とても小さく、たいへん素朴なものでした。古墳時代になって埴輪を墓に立てる風習がはじまると、鶏や水鳥、犬、猪など、動物の種類もずいぶん増えてきます。なかでも馬は、関東を中心に大型のものがたくさん造られました。それらは姿を愛でるために造られたのではなく、さまざまな祈りのためのものであり、宗教的な意義をもつものであったと思われまふ。だから似ていることはそれほど重要ではなかったかもしれません。

やがて仏教が伝わり、われわれの祖先は仏像に出会います。これによって日本人は、それまで知らなかった立体表現の方法を覚えていったようです。造るための材料も、土のほかに木材や金属、漆などが使われはじめます。

仏教の世界でも、動物はちゃんと役割をもっています。最初はホトケを守護するための霊獣として登場します。仏像の台座の周辺にすわっている獅子がそれです。獅子がライオンのことであるのはいうまでもありませんが、わが国の仏像は長く中国の仏像をモデルとしましたから、獅子も動物園で見ることのできるライオンではなく、中国風の獅子、つまり唐獅子が主流です。

奈良時代頃から徐々に、そして平安時代に入ってから格的に密教が導入され、日本の仏教は新しい段階をむかえます。この時期は動物彫刻の世界にとっても変革の時代となりました。動物の種類も増え、獅子のほかには象や孔雀、牛などが仏像の台座となったり、ときには仏像の頭の上へ顔をみせたりしています。彼らはホトケの聖なる力の象徴でした。逆にいうと、そのホトケの力が、彼らの性質になぞらえて説明されたのです。またこの時期には、現実には存在しない架空の動物も現れました。龍がその代表ですが、仮面のジャンルではほかにもいくつかの動物が奇異な姿をみせてくれます。興味ぶかいは、架空の動物はもちろん、獅子や象などこの世に存在する動物の場合でも、当時の日本人は実際には目にしなかったことですから(牛だけは事情が異なりますが)。そのような状況のもとで、彼らはどのような表現を生み出したのでしょうか。

いっぽう、わが国固有の信仰である神道の世界も、動物との関係はまことに深いものがあります。社殿にあつて玄關番をつとめた狛犬は、わたしたちにいちばん身近な動物彫刻でしょう。特定の神と結びついた聖獣には、春日社の鹿や日吉社の猿がすぐに思いおこされます。とくに近年、滋賀県内では、狛犬をはじめ各種の優れた動物彫刻が新発見され、あらためてその文化的風土の奥深さが実感されています。野洲・御上神社の木彫の馬は、神社に生馬を奉納する風習が、やがて絵馬へと変遷してゆくことを証拠づける重要かつ唯一の資料なのです。大津・若松神社で見いだされた狛犬や、同・平野神社から見つかった猿猴像など、多くの人にとって、はじめて目にする一級の作品は、けっ

して少なくないはずですが。寺院にくらべ神社に伝わった文化財の調査はやや遅れていることから、今後の調査の進展によって、さらにめざましい発見が期待できるでしょう。

今回の展覧会では、日本の動物彫刻の白眉である京都・高山寺の作品群や、滋賀県内で見いだされた未紹介の作品をふくめ、わが国の宗教美術を飾る優れた脇役として誕生したこれら動物彫刻の数々をあつめて、その歴史的展開をさぐります。と同時に、なによりも動物たちの変化に富んだ姿の妙を楽しんでいただくことが、ほんとうの願いでもあります。



大津市指定文化財 木造狛犬 若松神社蔵

# ミニ企画展

本館には、購入、あるいは寄贈・寄託をうけた資料が、数多く収蔵されています。これらは、企画展や常設展示などで紹介してきましたが、それ以外にも、皆様にお目にかけていない興味深い作品や資料が数多く保管されています。そこで、本年四月から常設展示室の一部を使って、これまでお披露目することのなかった作品を紹介する「ミニ企画展」のコーナーを新たに設けました。ここでは、約一〜二カ月に一回のペースで展示替えを行ない、テーマに沿って当館の収蔵品の数々を紹介いたします。また、調査の上で新発見の資料などが見つかった場合には、このコーナーでいち早くお知らせする機会を設けたいと考えております。ぜひご観覧ください。

## 平成一一年度上半期予定表

- 四月六日(火)〜五月九日(日)  
「広重『人物東海道』のすべて」
- 五月一日(火)〜七月二日(日)  
「大津のやきもの」
- 七月二三日(火)〜九月二日(日)  
「近江八景―名所風俗図の魅力―」
- 九月一四日(火)〜一〇月三十一日(日)  
「大津祭の幕飾り」

### ◆ 広重『人物東海道』のすべて ◆

四月六日(火)〜五月九日(日)

江戸時代の後期に活躍した浮世絵師・歌川広重は、近江八景や東海道五十三次などの浮世絵を描いたことで、あまりにも有名な人物です。特に彼は街道や名所の絵を数多く残しており、東海道五十三次シリーズも評価のいちばん高い「保栄堂版」を始め、全部で二十種類くらいにシリーズを世に送り出しています。

今回の「ミニ企画展」では、それら東海道シリーズのなかでも、街道をゆく人物をクローズアップして描いた「人物東海道」と呼ばれるシリーズ全五六枚を、一挙に公開します。そこには、さまざまな珍しい旅の風俗や名産、街道風景などが描きこまれており、特に旅行好きの方には興味が尽きないと思います。

① 江戸時代はどんな服装で旅していたの？

② 変わった馬の乗り方が描いてあるけど、本当にこんなことしてたの？

③ 旅籠屋の施設って昔は質素だったの？木賃宿という名はよく聞くけど、どんな構造だったの？

そんな皆さんのさまざまな疑問に、この「人物東海道」シリーズは見事に答えてくれます。東海道を江戸から京都まで旅するのに、昔はおよそ二週間かかりました。しかし今回は、わずかの時間で、江戸から京都まで旅をした気分浸っていただけることでしよう。

本展では、この浮世絵のほか、近江の街道を分かりやすく描いたイラストマップや、さまざまな宿場の現況を写したカラー写真パネルなども盛り沢山に展示します。皆さんのお越しをお待ちしております。

### ◆ 大津のやきもの ◆

平成一一年五月一日〜七月二日

今回のミニ企画展では、近世から近代にかけて、大津の地で生まれたやきものを紹介します。

膳所焼は、寛政年間(一六二四〜四三)、膳所藩主菅沼定芳によって同藩の御庭焼としてはじめられたとされるやきものですが、大江焼・国分焼・雀が谷焼などの膳所藩領内で焼かれたやきものの総称としてあつかわれることもあります。小堀遠州や本阿弥光悦らの高名な茶人に愛され、茶陶としての名声を獲得しており、大津のみならず近江を代表するやきものといえるでしょう。

梅林焼は唐三彩風の華やかな釉薬のかかったやきもので、膳所城下で天明頃(一七八一〜八九)に小田原伊兵衛がはじめたといわれ、土を梅林山から採取したことになんて名がつけられたと伝えま

す。そのほか、幕末の京焼の名工永樂保全が開窯した三井御浜焼(湖南焼・長等山焼)や、同じく幕末から明治以降まで、瀬田唐橋の近くで焼かれた瀬田焼(門平焼)など、全部で二〇件の館蔵品を展示します。



瀬田(門平)焼 釘彫茶碗 本館蔵

れきはくインフォメーション

7月	6月	5月	4月
17 土 ふるさと大津歴史教室 町並み博物館通りを歩く ○愛光幼稚園―曳山展示館―広橋榎跡―三橋筋子美術館(半日コース)	19 土 ふるさと大津歴史教室 立間観音と大津別院 ○高観音―関寺の牛塔―安養寺―関碑丸神社―大津別院(午後半日コース)	22 土 第179回土曜講座 湖南のゾウ化石 ○野洲川河川敷で発見されたゾウの足跡などの化石を中心に紹介 13時30分～15時 講師 氏丸 隆弘(中西町教育委員会)	24 土 ミニ企画展関連講座 人物東海道に描かれた旅の風俗をくわしく紹介 ○人物東海道に描かれた旅の風俗をくわしく紹介 13時30分～15時 講師 樋爪 修(本館学芸員)
10 土 第66回親子歴史講座 大津の職人さんめぐり③ 10時～11時30分 見学先 鞋前商店(鞋)	12 土 第65回親子歴史講座 折り紙に挑戦① ○ちよっとハイレベルな作りがいのある折り紙に挑戦しましょう。 10時～11時30分 講師 横谷賢一郎(本館学芸員)	15 土 ミニ企画展関連講座 近世近江のやきもの① ○徳楽瓶を中心に近江のやきものを紹介 13時30分～15時 講師 大槻 倫子(宝賀興立陶芸の森学芸員)	1 土 ミニ企画展関連講座 広重『東海道五十三次』の魅力と新しさ ○広重の『東海道五十三次』が大ヒットした。その魅力と理由を探ります。 13時30分～15時 講師 横谷賢一郎(本館学芸員)
3 土 ふるさと大津歴史教室 葛川溪谷に文化財を訪ねて ○神田神社―八所神社―遷来神社―勝華寺―明王院(バス一日コース)	26 土 ふるさと大津歴史教室 瀬田唐橋と近江国府 ○雲住寺―橋守神社―建部神社―近江国庁跡―浄光寺(午後半日コース)	29 土 ミニ企画展関連講座 近世近江のやきもの② ○湖東焼・膳所焼など、近世近江を代表するやきものを紹介 13時30分～15時 講師 谷口 徹(彦根城博物館学芸員)	8 土 第64回親子歴史講座 大津の職人さんめぐり② 10時～11時30分 見学先 大友(蒲鉾)
17 土 第176回土曜講座 古文書に親しむ ○大津の寺院の開帳のにぎわいを伝える古文書を紹介 13時30分～15時 講師 中森 洋(本館学芸員)	12 土 第65回親子歴史講座 折り紙に挑戦① ○ちよっとハイレベルな作りがいのある折り紙に挑戦しましょう。 10時～11時30分 講師 横谷賢一郎(本館学芸員)	15 土 ミニ企画展関連講座 近世近江のやきもの① ○徳楽瓶を中心に近江のやきものを紹介 13時30分～15時 講師 大槻 倫子(宝賀興立陶芸の森学芸員)	1 土 ミニ企画展関連講座 広重『東海道五十三次』の魅力と新しさ ○広重の『東海道五十三次』が大ヒットした。その魅力と理由を探ります。 13時30分～15時 講師 横谷賢一郎(本館学芸員)

※諸般の事情により、内容が変更される場合があります。  
※いずれの講座もはがきまで、お申込みください。

「図説大津の歴史」だより

今回は、「図説大津の歴史」(今までは「図説大津市史」としていましたが、書名が正式に「図説大津の歴史」と決定しました)近代の掲載資料のなかから、工芸作家・清水風外の作品を紹介いたします。

清水風外は、本名杉太郎、明治七年(一八七四)、膳所中庄の木工の家に生まれました。竹細工の名人で、昭和二十年(一九四五)七二歳で没するまで、多くの作品を残しました。

同じく膳所中庄の生まれで、京都画壇の雄として活躍していた山元春挙(一八七一一一九三三)が、大正六年(一九一七)に中庄にアトリエの蘆花浅水荘を新築すると、風外は春挙と交友をもつようになります。春挙は、名人気質で無欲な風外を愛し、彼の竹細工の名人芸が十分に發揮できるように、援助を惜しまなかつたそうです。

実際、蘆花浅水荘には、春挙が揮毫し



た書や絵を風外が彫ったものなど、竹細工の作品が多数残っています。写真はそのなかでも、風外が得意としたといわれる竹製の楽器で、右から、両面三絃、操琴(あやつりこし)、竹三味線です。また同荘の一室は「竹の間」と名付けられ、床柱から天井、窓、襖の引手や調度品まで、風外の手になるといふみごとな竹細工からなっています。

しかし、春挙が、昭和八年に六三歳で没すると、その交友も終わり、風外は、中庄の地を去って、南郷で晩年を過ごしました。晩年の作品として知られるのが、現在も五月五日の南郷鯉まつりで渡御する鯉みこしです。全長三・二尺、ケヤキ材を彫ったもので、昭和十二年の作品と見られます。